

觀無量壽經に於ける安心

加藤 哲道

觀經に、

「若有衆生願生彼國者、發三種心、即便往生、何等爲三、一者至誠心、二者深心、三者回向發願心、具三心者、必生彼國」

と説かれ、これは正しく安心説を示したもので、「願生彼國」は總安心で、至誠心、深心、回向發願心は別安心、即ち三心を示されたもので、この三心は行者心中具足せなければならぬのである。

初めに至誠心とは、古導大師の散位義（淨全二、五五）に、

「至者、眞誠者、眞欲明一切衆生身口意業、所修解行、必須眞實心中作、不得外現賢智、情迷相、內懷

虛假、貪瞋邪偽、好詐自端、惡性難信、爭同蛇蝎、雖起三業、名爲難壽、亦名虛假行、不名眞實行」

と論じている。即ち眞實心のこと、外に賢智の相を現じ、内に虚假心をいだくことなく、身口意の三業は全て、眞實心を以てする可きである。又記主禪師の行香用意問答に、（淨全十、七〇三）

「云眞実の心と云ふことなり、又その心に眞あり偽あり、（中略）内は各利の心に住しなから、外に往生を願う由をもつてなして、三業精進の人よと云る、五虚假心を言ふなり、此の人ば往生すべからざるなり、実あるをば至誠心と名づく、内外相応して三業の勤め外を飾らず眞実に往生の爲めと思うと至誠心と言ふなり」と明している。

深信とは散位義（淨全二、五六）に、

「深信之心」

と解し、さらに深信に信持、信法の二種の深信を明している。即ち信持とは散位義（淨全二、五六）に、

「一者決定深信自身是罪惡生死又更無劫已未常没常流転無有出離之縁」

と明し、行者自身は罪惡生死の何れでも出離の縁がないものと信ずること、信法とは同じく散位義（淨全二、五六）に、

「二者決定深信彼阿彌陀仏四十八願攝受衆生無疑慮衆彼願力定得往生」

と示し、阿彌陀仏の本願力に依じなければ、必ず往生できると確信することである。さらにこの信心の立て方について、就人立信と就行立信の二を説いている。前者は人に就いて信を立てること、本願を信するばかりでなく、觀經に説かれたる三福九品定散二位も往生できると確信し、又小經に於ける十方諸仏の證勸について、深く信ずること、後者は淨土に往生する行について信を立てること、散位義によると、この行に正行、雜行の二を立て、いる。要するに深信は一は自分自身の罪惡を知ることであり、二は三仏三經によつて阿彌陀仏の本願力を信

ずることである。又記主上人は行者用意問答へ淨全十、七〇三に、

「言深く信じて疑はぬ心なり、これに二つの信あり、一には自身は是れ罪惡生死の阿夫にして、賊劫より以來常に没々常に流転して出離の緣あることなしと深く信ず、これは自力にては生死を出でかたしと、我が身の程を信ずるなり、二つは阿鉢陀仏の四十八願成就してかゝる衆生を助け玉うと、深く信じて疑いなく、慮りなければ、彼佛の願力に乘じて往生すると信ず、阿鉢陀仏五劫に思惟して、大悲の肝膽を碎いて衆に出し玉う四十八願の本意は、唯かゝる自力にて生死を出でかたき衆生を救ひ玉うと心得つれば、かの願力に依つて生るゝと信じて、疑はぬを深心とは言ふなり」

と示し、自己自身は罪惡が重く、出離の緣がないものと信じているので、そのまゝ鉢陀の本願力によつて、救われるものであると云ふことを信じて疑わぬことである。以上のべた深信の相は、古来より行者が修道の上に於いては才一要義とされてゐる。

回向発願心とは、同じく散位義へ淨全二、五六に、

「過去及以今生身口意所修世出世位根及隨喜他一切阿聖身口意業所修世出世位根以此自他所修位根悉皆眞實深信中迴向願生彼國」

と示し、記主は行者用意問答へ淨全十、七〇四に、

「念仏を先として一切の位根を極樂に迴向するなり、過去と今生との位根を一つも残さず迴向すべし。昔は何の爲にも思へ、今は取返して往生のためと思ふべし、但し念仏の行者になりなん後故難行を修し加へて、迴向せよとは非ず、只始めより用いたる位を今迴向するなり。」

と明されている。即ち徒らに難行を修して淨土に廻向するのではなくして、念仏をオ一として一切の菩提を淨土往生のために廻向するのである。

以上三心を述べてきたが、これらを要約すると至誠心は、眞実誠の心で往生の爲には偽るこの出来なれところで、深心は自分自身の菩提根と阿彌陀仏の本願力を深く深する心、面向発願心は、自己并修の行業を廻向して往生を願う心である。この三心は虚假心、疑心、不廻向心の三種の心を退治するもので、虚假心は至誠心、疑心は深心、不廻向は廻向発願心に、それ／＼なううものである。そしてこれを淨土、阿彌陀仏、念仏の三つの上に安置するので、これを安心と言っている。

さらにこの三心の具足、不具足については、鎌西上人は未代念仏授手印、記主上人は領解鈔に於いてくわしく論明しているのである。